

ふじのくに自然系博物館（仮称）基本構想検討委員会の設置

事務局

これまで当 NPO の天岸理事長が強く設置を望んでいた、外部有識者による静岡県「自然史博物館」の基本構想検討委員会が、川勝知事の意向も入れて今年度設置されました。そして、その第 1 回委員会が、平成 25 年 6 月 17 日に現在の静岡県自然学習資料センターの移設整備が検討されている旧静岡県立南高校で開催されました。

基本構想検討委員会の設置については、その概要としておおよそ以下のようなことが示されています。「平成 26 年夏を目途に静岡南高校に移転し、まずは自然学習資料センター（仮称）としての供用開始を行う。移転数年後に博物館法の法定施設への移行を目指して、収集保管、調査研究、展示・情報発信、教育普及の諸活動の段階的な充実を図ることとし、平成 25 年度は外部有識者の意見等を踏まえ、ふじのくに自然系博物館（仮称）の基本構想を策定する。」

すなわち、当 NPO の前身の自然博推進協設立（1995 年）から 18 年目にして、ようやく正式に静岡県「自然史博物館」の基本構想を検討する委員会が設置されたこととなります。ここで検討された原案に従って「自然史博物館」構想がさらに具体的に練られ、平成 26 年度に移転する自然学習資料センター（仮称）は、数年後に私たちが永い間望んでいた県立「自然史博物館」に移行される運びとなりました。

この基本構想検討委員会では、「“ふじのくに”にふさわしい特色ある自然系博物館としての諸機能のあり方など、今後中期的に目指す博物館活動の充実の方向性を拓く基本構想を策定する。」ことがうたわれています。また、具体的には 1) 箱物主義でない新しい博物館のモデルとなる 21 世紀型の施設（ハードに金をかけるのではなく、ソフトパワー重視の施設）、2) 廃校舎の特性を活かし、新しい廃校利用のモデルとなる施設とし、デザイン性

を重視して、若者に親しみやすい場を演出、3) 当施設内に来訪者を呼び込むのではなく、県内各地の施設を展示空間とする「モバイルミュージアム」としての整備、4) 富士山世界遺産センターと伊豆半島ジオパークなどとの連携が、あげられています。

委員会の委員長は東北大学教授で静岡県富士山世界遺産推進担当参与でもある安田喜憲氏で、副委員長には当 NPO 理事長の天岸祥光氏が選出されました。以下、国立科学博物館事業推進部の小川義和氏、東京大学総合研究博物館教授の遠藤秀紀氏、東京大学総合研究博物館特任教授の洪 恒夫氏、シルク博物館館長の高桑正敏氏、当 NPO 理事で東海大学自然史博物館学芸員の柴 正博氏、静岡大学教育学部教授の熊野善介氏、静岡文化芸術大学デザイン学部准教授の中山定雄氏、常葉大学社会環境学部教授の下田路子氏が委員となっています。

第 1 回の委員会では、池谷企画広報部理事と安田委員長の挨拶につづいて、各委員の自己紹介の後、南高校の校舎内部の見学を行い、県の担当者から改装計画の説明がなされました。その後、各委員からの自由な発言があり、その中には隣接した大学との連携や学芸員の雇用の重要性、施設整備の「ハード」「ソフト」「システム」の三要素のうち「システム」にあたる管理運営計画をきちんと立てていくことの必要性、既存の博物館と差別化のために来館者が博物館の収蔵や研究を見ることが出来る「ミドルヤード」の充実、博物館は物と人が共に育っていく知的好奇心の歴史の記録の場であり、安定的に物を収蔵して県のかげがえの無い記録として残していく事が重要、などの意見が出されました。

第 2 回（9 月）と第 3 回（10 月）は各委員が具体的な提案を行い意見交換して、第 4 回と第 5 回で構想がまとめられる予定です。